

年中行事 2 (春)

大野城市教育委員会



節分

節分 2月3日ごろ

立春の前日が節分で2月3日ごろに当たります。古代中国では立春、立夏、立秋、立冬と季節の変わり目の前日はすべて節分といました。だが一般には春の節分だけが重んじられています。この行事が古代中国より日本に入り定着したのが節分で古くは追儺、鬼儺と呼んでいました。日本最初の節分行事は706年です。ただしこの時代以降室町時代あたりまでは12月の大晦日に行っていました。豆をまく習慣は南北朝時代からで、邪鬼よけのまじないとして柵の枝にイワシの頭を刺し戸口や窓にはさんだり、これにニンニクやビルなど臭気の出る植物を添える風習も各地に見られました。

針供養 2月8日

東京の浅草に淡島神社があります。この神社に一年間使ってさびたり折れ曲ったりした針を持ち寄り針の供養と裁縫の上達を願ったのが針供養です。江戸時代末に広まった比較的新しい年中行事ですが、針を供養するという発想自体は古くからありました。これとは別に2月8日という日は正月行事が終わるという考えがあり、この日に野菜汁を食べ、まじないなどを行う風習がありました。これと結びつき女性は裁縫から解放されくつろいで一日をすごすようになりました。



針供養

養蚕



養蚕業は明治末頃からさかんになりました。昭和4年に福岡県の蚕業試験所が現在大野城市役所の建っている場所にできましたが、戦後は化学せんいによって全く衰退しました。シルクロードはその名のとおり中国の絹が紀元前二世紀頃から中央アジア、ペルシア、メソポタミア、ローマにまで運ばれ、日本には紀元前一世紀頃に伝わりました。飯塚市立岩、春日市須玖遺跡より絹の平織が発見されています。その後、奈良、平安時代に全国に伝播しました。戦前は欧米の女性用のストッキングやスカーフとして輸出がさかんでした。

ひなまつり 3月3日



女の子の節供（節句は当て字）として今日盛んに祝われているひな祭は、もともと疫病などの災いから逃れるため神に供物をささげ、まじないなどを行う日の儀式でした。そのルーツは古代中国でこの日水辺で祓いの行事を行い、自分の身代りになる人形にけがれを移して川に流しました。この人形がひな人形もとの形です。またひな祭を「上巳の節供」というのは元来、3月上旬の巳の日に行ったからで3月3日と固定したのは後世のことです。中国から日本に入ったひとがたと別に「ひいな」と呼ばれる紙製の玩具人形がありました。この「ひいな」に供え物を飾って遊ぶのが平安時代の遊びで、これと混同が起こり江戸時代からひなを飾って祝う日とされるようになりました。

お彼岸 3月21日ごろ

先祖のお墓参りをするお彼岸の行事は、非常に古くから行われていた日本の代表的な年中行事の一つで、春と秋の年二回行います。いずれも期間は一週間で、まん中の日を中日と呼び、春分、秋分の日が中日にあたるように行事を行います。春分の日には昼夜の長さが等しく、この日を境に次第に昼が長くなり、暖かさも増してきます。また太陽が真東から昇り真西に沈みます。古代日本人は東をあらゆる生命の源の方位と考え、西を死者の国の方位と考えていました。この太陽信仰が仏教と結びつき、彼岸とは向こう岸を意味し、煩悩を離れた永遠の安住の地が西方浄土にあるとする信仰が広まるようになりました。



花見 3月下旬～4月上旬

日本人に最も愛され続けてきた花といえば桜が一番でしょう。たんに花といえば桜をさし、花見といえば観桜を表すといったように桜は花の代名詞となっています。花見が一般庶民の年中行事になったのは比較的新しく江戸時代以後といわれます。桜の観賞が大いにはやるようになったのは平安時代からでそれ以前は梅が代表的な花で、それも中国の影響でした。

世の中にたえて桜のなかりせば 春の心はのどけからまし—在原業平
ねがわくは花のもとにて春死なむそのきさらぎの望月のころ—西行法師。